



## 編集後記

最近気になるのが、政治家たちの目線だ。安倍元総理の国葬に際して、岸田首相が謳った「弔問外交」でも、各国首脳陣と面談する岸田首相の姿を見ると、度々目線を手元の文書に落とし、原稿を読んでいる。インドのモディ首相との会談では、終始手元のメモを読んでいる感じだった。

一方、松野博一官房長官は10月2日に、拉致問題担当大臣に就任後初めて、鳥取県米子市の松本京子さんが北朝鮮に拉致された現場を視察した後、拉致問題の解決を求める集会に出席し「この地で実際に拉致が行われたことを実感するとともに、京子さんの帰りを待ち続けている孟さんの気持ちや胸がしめつけられることとあります」と発言したが、この際もほとんど机上の原稿に目を落としたままだった。この図を見て、ほんとうに松野官房長官の「胸がしめつけられ」ていると感じた人はそれほど多くはないはずである。しかも、誰が見てもその原稿は事前に書かれたものであることは明らかである。

1対1の対面で会談する際、その基本的なマナーは相手の目を見て話すこととであり、原稿に目を落としたままであるいは原稿を見ながら発言することは、対談相手に対して非礼であるように思うのは筆者だけだろうか。

また、記者会見のような1対複数の状況にあつても、発言者がその心境を吐露する状況にあつて、「胸がしめつけられる思い」を原稿に目を落としながら、朗読して伝えられたとして、いったいどれほどの人がその心境に同化し、同じ思いを共有できるだろうか。

閣議のみで国葬を決定したり、世界平和統一家庭連合(旧統一教会)と政治家の問題を「点検」だけで済ませたり、岸田首相の標榜する「丁寧な説明」は陰を潜めている。

いずれにしても、いまの政治家諸氏は人前で発言する際に「読む」ことに終始し、当意即妙なるアドリブが効かないことは確かだろう。

間違つた発言や失言を重ねて槍玉に上がる状況は、国会などでもよく見かける光景だ。そこに陥りたくない気持ちにはわからないでもないが、それにしてもあまりにあからさまであるし、情けない。政治家としての資質に欠けて

いるのではとさえ思ってしまうのだ。

10月3日、第210回国会における岸田内閣総理大臣所信表明演説では「先週執り行った安倍元総理の国葬儀は、厳粛かつ心のこもったものとなりました。海外からお越しになつた多数の参列者の方々から寄せられた弔意に対し、礼節をもつて、丁寧にお応えすることができたと考えております。その際、国民の皆様から頂いた様々な御意見を重く受け止め、今後に活かしてまいります。また、旧統一教会との関係については、国民の皆様の声の正面から受け止め、説明責任を果たしながら、信頼回復のために、各般の取組を進めてまいります。」(官邸ホームページより)というくだりがあったが「礼節をもつて、丁寧にお応え」した割には手元の原稿を読んばかりであつたし、旧統一教会問題では「信頼回復」をするということは、信頼を失つたと自覚していることになつてしまうと思う。

いずれにしても、岸田首相を筆頭に、政治家諸氏には「自分の言葉で話す」ことを心がけていただきたいと願う。

(溪)

# 月刊 公論

11月号 第55巻11号

令和4年11月1日発行 毎月20日発売  
本体価格1,100円(税込) 送料87円

発行人 大中 吉一 編集人 林 溪清  
発行所 株式会社財界通信社  
〒160-0008 東京都新宿区四谷三栄町10-12 ボナフラワービル  
TEL.03-5379-5611(代) FAX.03-5379-5616  
印刷所 株式会社広済堂ネクスト  
取次店 日本出版販売/楽天ブックスネットワーク

- 直接ご購入をご希望の方は、本社までお問い合わせ下さい。
- 万一、乱丁、落丁などの不良品がございましたら、お取り替えいたします。